

ご 挨拶

このたび、第 52 回日本組織細胞化学会総会・学術集会を担当させていただきます。北陸の金沢の地で本集会が開催されるのは初めてのことです。春に東日本を襲った未曾有の大震災の後、学会活動も含めて日本全体が萎縮している印象があるにもかかわらず、今回皆様から多くの演題をお寄せいただき、心から感謝申し上げます。

私が最初に組織細胞化学という言葉に接したのは 1983 年秋、東海大学での免疫組織化学講習会に参加したときだと記憶しております。一時帰国しておられた中根一穂先生から直接指導を受け、浜島義博先生による講義を拝聴して感銘を受けました。当時私は米国でオートラジオグラフィを用いて細胞周期研究を行っていた教室で学び、帰国して組織学教室の助手に就任したばかりで、形態と分子とを結びつけることが今後の組織学者の道だということを明確に実感できました。すぐに文献を頼りに *in situ hybridization* の技術も身に付け、その後 20 年近くは、もっぱら光顕および電顕レベルの酵素抗体法と RI による *in situ hybridization* を道具として研究をしました。本学会の会員になったのは 1986 年のサンフランシスコでの集会からだったと思いますが、その後私は数年置きにしか集会に参加せず、あまり学会に貢献してきませんでしたので、錚々たる歴代の会長に伍して今回の集会を主催させていただくのはまことに畏れ多いことです。

率直に申し上げて、私が入会した頃と比較して、会員数も減り、学会の元気が失われてきたという気がいたします。これは一つには、光顕レベルの免疫組織化学があらゆる分野の研究者にとってごく当たり前の道具になり、ことさら方法論を意識することがなくなったという理由もあるでしょうし、逆にバイオイメージングにおける蛍光検出装置などは特殊で高価なものとなり、誰でも気軽に使えるものではなくなったという理由もあります。また細胞や動物に導入した遺伝子の発現をレポーターで検出することなどは組織細胞化学そのものであると思われるのですが、それを用いる研究者がみずから組織細胞化学者だと考えていないという事情もあるかもしれません。

今回の集会では、まず高速原子間力顕微鏡の開発者である金沢大学理工研究域の安藤敏夫教授に「タンパク質分子の構造と動的挙動の高解像度撮影」の特別講演をお願いしました。生体分子の挙動を直接観察することは組織細胞化学と相通じるものだと思います。シンポジウムでは「レポーター遺伝子発現マウスを利用した組織化学的研究の新展開」および「組織化学と分子イメージング—ミクロからマクロまで」により最近の新しい技術や研究法を紹介し、また高松賞を受賞された藤本豊士教授による講演「電顕で脂質を見る」およびワークショップ「組織細胞化学における電顕の活用」では電顕の組織化学を駆使した研究をご発表いただきます。また免疫組織化学、糖鎖組織化学および *in situ hybridization* の病理学領域での応用に関して、2つのシンポジウム「肝胆膵研究の新展開」および「DNA *in situ hybridization* の病理診断への応用」を組ませていただきました。最後に、初の試みとして日本唾液腺学会との共催ワークショップ「組織化学から見た唾液腺の正常と異常」を企画しました。ほぼ、すべての組織細胞化学的技術について、すべての学問領域をカバーしたと自負しております。これらのセッションを通じて、あらためて様々な専門分野の研究者が共通の技術への興味により結びつくことの意義を感じていただければと願っております。

金沢大学医学部（現医学類）は、1862 年の加賀藩による種痘所の開設に端を発して、来年には創立 150 周年を迎えます。今回の会場である宝町キャンパスは、旧制金沢医学専門学校が 1905 年に現在地に移転して以来の医学部所在地であり、日本三大名園のひとつである兼六園までもほど近い距離にあります。今回は校舎を利用し、運営も教室員の手作りで行うなど質素を旨とする集会であるため、何かと行き届かない点をご容赦ください。1868 年にフランスから購入された人体模型（キンストレーキ）などを展示した医学部記念館資料室をご覧ください。金沢は伝統文化にあふれた文句なしに魅力的な都市であり、9 月から 10 月にかけては最も気候のよい季節ですので、学会の前後に観光を楽しまれるのも一興と存じます。

第 52 回日本組織細胞化学会総会・学術集会

会長 井関 尚一